

(公) 南信州地域資料センターでは、不必要になった地域資料や捨てられる運命だった地域の印刷物の収集・保管を第一義として活動しているが、地元在住者の著作や地元が舞台となる著書も収集の対象となっており、閲覧できる。

私は高校時代から松本清張や高木彬光などあまたの推理小説を乱読してきた。内田康夫の「〇〇殺人事件」などは旅情豊かで「浅見光彦ファンクラブ」に入りかねない程だが、寄贈された本の中に『ホオッサマグナ連続殺人事件』を見つけた。

20年前の6月10日に地元印刷所から発行され、著者は「宮西啓」なる市内八幡町在住の方らしい。

ワープロの初期の頃、句読点が行頭にき

## 「実にユニークな推理小説」 池田健一

てしまうことはなど、気になる表記はママあって時代を感じた。私も「罵倒観世音」など後で印刷になった自身の文章を見て驚愕したものだ。

それはともかく、この小説の内容は大井川鉄道沿線金谷町の製茶

業の娘に生まれたヒロインの稀代の一代記および西部不動産の興隆と終焉である。普通の推理小説と異なるのは彼女の父親が殺されていたことと、同じ犯人によって恋人の弁護士に続いて彼女もまた殺されてしまうことであ

る。内田康夫ならほとんど冒頭から死体発見であって、謎解きやサスペンスはそのあとに続く。ところがこの509ページに及ぶ長編にあって、殺人事件は最終章の479ページになって、やっと起こる。トリックもサスペ

ンスもないから犯人は容易に特定でき、事件は速やかに解決する。謎解きもなく主人公さえいない。実際の展開や犯行状況は推理するしかない。それゆえの推理小説だと言うなら実にユニークである。



奥付によれば作者は  
その隠された主題は、「怒川」なる架空の河川名に込められた天龍川、そこに建設された鉄道および「平間ダム」と仮称された平岡ダム工事である。

近代史が専門で「西南アジア史」や「日本史資料」の著作もある。「中央集権国家では、国家とは国民ではなく、役人である」と明解に看破して片鱗を見せる。それを語り継ぐべきという意図が垣間見える。

平岡ダムは昭和13年着工。奇しくも私がこの稿を書き始めた6月29日、「平岡ダムの歴史を残す会」主催の現地見学会には30人が参加したと翌々日の信毎が報じている。韓国や朝鮮人約2000人とか捕虜200から300人とか大雑把なのに、昭和19年中国からスパイ容疑の名目で連行され強制労働に従事した人数については小説中で1084人、紙面では884人。200人もの差がある。き

ちんと調べた人、記録を残した人、忘れさえず語り継ぐと決めた人……この国はまだ救われる。埋没した歴史と言うより、あえて隠蔽し忘れようとした感のある伊那谷の近代史。「暗い谷間の人々に、電車を通し、ダムを作つて、明かりを灯し、海のあることや世界のあることを、汗と血を流して教えてくれたのは、文明社会の一員に加えさせてくれたのは、アイヌ人であり朝鮮人であり中国人、……そのことを谷間の人々は知っているのであるうか。」と問いかけ、歴史を学び教える者としての心情を吐露している。